

夏合宿

46期 塩野貴之

期間 2002年8月2日～10日

地域 南アルプス・光岳・上河内岳・聖岳・赤石岳・荒川三山

目的 夏山を楽しむ

入山地 寸又峡温泉

下山地 塩川

| | |
|-----|---|
| 一日目 | 寸又峡温泉9:15…9:45夢の吊橋…10:00尾崎展望台10:15…12:00昼食 12:45…13:00千頭ダム…14:35お立ち台15:00…16:00 大樺沢…17:45小根沢18:10…18:50林道脇 幕営 |
| 二日目 | 林道脇5:45…6:30大根沢…7:50三昇の滝8:25…9:37光岳登山口 幕営 |
| 三日目 | 光岳登山口4:50…6:10Y尾根上6:40…8:25踏跡8:40…9:05正規登山道 …9:501656m三角点(昼食)10:40…12:10石見平12:30…14:12 百俣沢の頭14:20…15:35光小屋泊 |
| 四日目 | 光小屋4:50…5:00光岳5:30…5:40光小屋6:40…7:25三吉平7:35…8:35 易老岳8:50…9:40休憩10:00…10:40喜望峰(仁田岳往復)11:25…12:12 茶臼岳12:35…12:52横窪沢分岐(昼食)14:10…15:33上河内岳15:55…17:50聖平泊 |
| 五日目 | 聖平5:15…7:25小聖岳7:37…8:43聖岳(奥聖岳往復)10:05…11:00 聖岳・兎岳鞍部(昼食)12:37…13:12兎岳避難小屋13:33…13:45 兎岳…14:20小兎岳14:30…15:45中盛丸山16:00…17:00百間洞山の家泊 |
| 六日目 | 百間洞山の家6:03…6:53百間平7:05…8:45赤石岳9:35…10:00 小赤石岳…10:28大聖寺平10:45…11:25荒川小屋泊 |
| 七日目 | 荒川小屋5:05…6:22荒川中岳・悪沢岳分岐6:36…6:40中岳避難小屋6:50…7:27 悪沢岳(昼食)8:03…8:50悪沢岳分岐9:20…10:15休憩10:33…11:00 水場11:20…11:35高山裏小屋泊 |
| 八日目 | 高山裏小屋5:20…6:10板屋岳6:25…7:302623m三角点7:45…8:35 小河内岳・避難小屋(昼食)9:20…10:20烏帽子岳10:40…11:00 お花畑11:22…11:30三伏峠小屋泊 |
| 九日目 | 三伏峠4:30…5:30水場5:45…6:30塩川バス停 |

夏合宿の計画書を初めて見たとき正直驚いた。

寸又峡から延延40Km林道を歩き、そして光岳から聖、赤石、荒川、塩見、間ノを越えて北岳まで8泊9日で歩き通すという壮大なものだったからである。

8泊と言うからには相当な荷物の重さになる事を覚悟し、35Kgの荷物を背負っての階段トレーニング(レンガ坂135段)を何度もやり本番に備えたが、出発前日までテストとレポートに追われ十分な準備が出来たとは言い難い。

僕は食料計画を任されたが、料理下手で山での食事というものを良く知らなかったためにかかなり悪戦苦闘し、過去計画書や「山溪」を参照しながらやっと作り上げるなど出発直前まで慌ただしい日々が続いた。

結局、授業のレポートを一つ完成できぬまま出発となってしまったが、ともかくも予定通り出発する事はできた。これからどんな事が起きるかも知らぬままに。

今回の夏合宿に参加したメンバーを一覧しておく。

CL S.K 経済3年 44期 神戸市出身
SL N.T 工学3年 44期 横須賀市出身
S.Y 工学3年 44期 横須賀市出身
アンディ 経済2年 46期 ハンガリー国出身
塩野貴之 教人1年 46期 千葉市出身
佐久間大策 工学1年 46期 徳島市出身

8月1日(木)

辛く長き期末試験を終えていよいよ待望の夏休みを迎えたその日、僕は今学期最後の授業に出席すべくいつも通り8時前の総武線快速に乗り横浜へ向かった。

いつもと違う点の一つ、100リットルの大ザックを背負っている。

サラリーマンらに奇異な目で見られつつ、満員列車に揺られること1時間20分で横浜駅に到着。
本来なら自転車で一息に大学へと行くところだが自転車の鍵を紛失し、のこぎりでハンドルロックを切断中であるため歩いて大学へ。

真夏の光線が容赦なく降り注ぐ中、個人装備と父の実家の野菜とですでに20Kg以上あるザックを背負って急坂を登り、汗びっしょりでフラフラになりながら大学に着いた。

山へ行く前にこんなに疲れきってはどうしようもない。

1時間30分の授業を受け、直射日光により異常な高温となっている部室へ行ったがS.Y先輩がいない。

S.K先輩が電話してみると今起きたのこと。集合時間に起きるとはさすがS.Y先輩である。

ガストで昼食をおごってもらい、和田町へ食料の買出しに行く。

9日分の食料に3日分の予備食、3食の非常食であるからまさに膨大な量である。

米だけでなんと20Kgになってしまった。部室に戻ってパッキング。

お、重い。想像以上の重さで35Kgはあるに違いない。これに水4リットルが追加されたらどうなってしまうのだろうか。一抹の不安を抱えながら、ワングル部6人衆は横浜駅行きのバスに強引に乗り込み壮行会をしてくれる先輩方が待つ居酒屋へ向かったのである。

居酒屋で41期から43期の先輩方に酒に飯にたくさん飲み食いさせてもらいすっきりいい気分になってしまった。特に最年少の佐久間君は先輩達に可愛がられ、かなりの量の酒を山に行く前から飲まされフラフラになっていた。

折しも横浜は花火大会で横浜駅もいつも以上の混雑であったが、その中を先輩方の見送りを受け予定通り20時22分発静岡行の列車に帰宅客と共に乗りこんだ。それにしてもいい先輩達だ。感謝、感謝。

藤沢で座席に座れ、僕はザックにもたれウトウトし、隣りでN.TさんはOBの先輩の差し入れである100円の小説を読む。佐久間君は例によって真っ赤な顔をして熟睡する。

目覚めると三島で、流れ去る景色をボーと眺めつつこれからの山旅に思いを馳せていると、いつの間にか終点の静岡であった。静岡で、1分乗り換えで豊橋行に乗車。意外にも混んでおり30分ばかり立ったままN.Tさんと雑談していると、23時45分、本日の宿、金谷駅に着き下車する。

翌日の朝食の用意はしていなかったために、駅から10分ほど離れたファミリーマートに弁当を買いに行く。知らない町を夜歩くのは何故か気持ち良い面白い。

金谷は東海道の宿場町であっただけに歴史を感じさせる、落ち着いた町並みで気に入った。

弁当をぶら下げて駅に戻り、駅のベンチの上や床にロールマットを敷いてごろ寝する。

明日は林道歩き40Kmだからよく寝とかなければと思いつつ。

8月2日<金>

終電後は静かに眠れるかと思っていたが、その判断に金谷駅は東海道本線の駅であるという恐ろしい事実が含まれていなかった。

東海道本線は深夜、貨物列車と夜行列車の往来が非常に頻繁であるのだった。およそ10分ごとにあの貨物列車の大音響が駅車内に脳天を揺さぶるがごとくごだまし、ウトウトしかけると巨大な目覚し時計が鳴り出すといった状況が一晩中続いた。結果、人間とは思えぬ体質を持ったS.K先輩を除き、皆熟睡できぬまま朝を迎えることとなってしまった。

5時半に起床し、一晩中駅でうろろしていたおじさんに話し掛けられたり、朝一でやってきた南アを登山するというおじさんに、もし雑畑ダムへ行くのなら井川から同乗させてくれないかと頼まれたり(静岡から雑畑ダムへのバスはこのときは県道が通行止めのため運休中であった。僕達は寸又峡温泉から入山するので関係なかったが)しつつ、大井川鉄道の始発列車を待っていた。しかし、6時18分が始発だというのに6時10分になっても、大井川鉄道の駅舎の扉が開かない。やきもきしながら戸の前で待機していると6時15分、発車3分前になってようやく運転手自らが扉を開けてくれた。さすが大井川鉄道と言うほかない。

6時18分発千頭行の列車は元近鉄特急用の車輛で、かなりリッチな車内であった。さすがは大井川鉄道である。

大井川鉄道と言うだけはあって、徹底的に大井川に沿うのであるが肝心の大井川の水量が極端に少なく、S.Tさんが「あの川原で野球でもサッカーでもなんでもできるよ」と言うほどやたらに川原が広く、これもダムのおかげなんだろうなと、勝手に納得する。それにしても大井川鉄道の駅はなんとノスタルジックな雰囲気気に包まれていることか！

木造の駅舎、木造の電信柱、駅員のあの制服と顔、周辺の集落ののどかさ、この古ぼけた駅名標、ここは平成14年の現代ではない。さすがは鉄道ファンから絶大な人気を誇る大井川鉄道だ。

そして意外にも乗車客が多い。高校生が多いとはいえ、まだまだ沿線住民の貴重な足となっているのだと実感できて、一鉄道ファンとしてうれしいこと限りない。

見所多き大井川鉄道の1時間11分の旅はまたたく間に過ぎて、7時29分定刻より1分遅れで終点千頭に到着。熟睡していた5人と共に寸又峡温泉行のバス乗るべく下車する。大井川鉄道はこの先もナローゲージであり、かつアプト式区間を擁する井川線が井川まで延びており乗車してみたいこと限りないが、今回は鉄道に乗るために来たのではないと自ら言い聞かせ涙を飲んで皆に続き下車した。

そのなかの一軒、名産川根茶を売る店で佐久間君が水出し緑茶を購入。今回の山行ではこのお茶が後してから、おばさんの車掌が乗っている寸又峡行のバスに乗車。僕達6人のみの貸し切りであった。

8時ちょうど、定刻に発車した大型バスはバスが通るとは思えない細いくねくね道を、遙か眼下に谷間を見下ろしながら慎重に走る。寸又峡温泉は想像以上に山奥の秘湯であったと認識する。ところで、このおばさん車掌の役割は少々謎が残る。たまにごく簡潔に、あそこに見えるのは中部電力の何とか発電所ですなどと説明してくれるが、とくにこのバスに乗車する意味は感じられない。ワンマンバスでも十分に対応できると思えたが。しかも登山客に慣れていないのか、大きな荷物は予め宅配便で送っておいてなどと言う。何か釈然としないまま定刻より早く8時35分に寸又峡温泉に着き下車。

近くのおばあさんが一人で店番をする商店で豚肉と果物の缶詰を購入する。こういう田舎の商店の何とも鄙びた雰囲気はたまらない。しかも、店構えに似合わずどんな物でも奥から出てくる。これぞ山奥の何でも屋。

さて買うべき物を買った僕らは重量調整をしてから、9時15分いよいよ南アルプス大縦走の初めの一步を踏み出した。かなり良い味を出している山奥の温泉郷の中を進み、観光客も多く訪れる『夢の吊橋』へ向かう。この吊橋を渡るのは一応無料であるが、募金箱とおばさんがおり、いくらかの募金をせねば通れないようになっている。主将がコイン一枚を入れ、登山者ノートに記入する。林道をしばし歩き、右へ階段を下りていくと、エメラルドグリーンの湖水に浮かぶ全長90mの夢の吊橋に着く。青き空、深い緑の木々、エメラルドの水面、鳥の鳴き声、木々のそよめき、全身で山の息吹を感じながら、重い荷物に多少よろけつつ美しい吊橋を渡った。

観光客の家族連れにどこまで行くのか尋ねられ、山中で8泊しながら山梨県の方の山まで行くと言うと信じられないといった表情で6人の姿を眺める。

『夢の吊橋』から急な登りで林道に復帰し、わずかに歩くと自販機と往年の森林鉄道の車輛(昭和43年で廃止)が展示された尾崎展望台に着く。営林所のおじさんに出会い、林道についてと光岳の登りについて有用な情報をいろいろ教えてもらう。

尾崎展望台から先は観光客が踏み入れない林道の領域となる。ゲートをくぐり、寸又川右岸林道の千頭ダムまでの10Kmに及ぶ林道歩きが始まった。小沢が連続し南アルプスの天然水を無料でがぶ飲みしつつ細い林道を行く。

佐久間君に兄上が通われる防衛大学の裏話をいろいろ聞きながら、素掘りの真っ暗なトンネルを何本か通るといつの間にか千頭ダムの手前まで来ていた。12時ちょうどに林道脇でサンドウィッチの昼食とする。『南アルプスの天然水』で入れた水出し緑茶が実にうまい。

昼食を食べ終え、13時千頭ダムを通過。右岸林道はここで終わり、左岸林道まで上がるため荒れた登山道に入る。トップを任された僕は、蜘蛛ノ巣の多さと蒸し暑さに辟易しながらも棒を振り回しながら木の枝が登山道を覆う道を歩いた。この登りで外付けしておいた差し入れの『うまい棒』30本がかなりの被害を受けた。

逆河内林道を横切りなおも荒れた山道を、雷のゴロゴロという無気味な音にさらされつつ左岸林道を目指す。後に振り返ればこの時の雷雨で、三伏峠で一人落雷によってやられたのである。雷の危険は重々認識していたが、幸いにも今回の縦走である無気味な音を聞いたのはこの時だけであった。

14時30分、左岸林道のお立ち台と呼ばれる展望台に飛び出る。標高1080m、1時間半の登りで500m稼いだことになる。正面に前黒法師山のピラミダルな大きな山容が見え、遙か下に寸又川の流れが見える。重い荷物でかなり体力を消耗したが、光岳登山口まで23.5Kmという恐ろしい道標が立っていた。誰もがこの時、予定の登山口まで行くことをあきらめた。

幅2車線ほどある林道をもくもくと歩く。途中、静岡県警の四輪駆動車が猛スピードで通過する。林道脇のガレ沢で水を補給しさらに奥地へ。16時、大樺沢。ついにとんよりした空からしとしと雨が降ってきた。しかし大して強い雨ではないので雨具をつけずにそのまま強行する。

16時25分、雨が止んだので林道脇で休憩する。皆かなり疲れているようで25分たっぷり休憩した後、小根沢を目指し再び歩き出す。アンディと二人で先行し、色々な話をしながらかなりのハイペースで歩くこと1時間、ようやく小根沢までたどり着く。それにしてもなんと忠実に沢をまわりこむ林道であることか。直線距離はそれ程ないにも関わらず沢があるごとに深く、深く谷間に入り込むために、何倍もの距離を歩かされることになっているのだ。皆の到着を待ち休憩すること20分にして最後にN. Tさんが到着。佐久間君は木の枝のストックを両手に持ってから急激にスピードアップしたらしい。僕の足は新しい革靴のために初日にしてまめだらけ。痛みをこらえ再び歩き出す。

19時、林道脇の建設中の営林小屋に着き、体調が悪そうで遅れているS. Tさんを待つ。N. Tさんは何とかたどり着いたが、限界のようなのでここに幕営することになった。光岳登山口まで残り12Kmの地点であった。

早速、豚肉とジャガイモ、人参、大根、里芋をぶち込んだとん汁を作り、米を炊き夕食とする。夜、人工の光が全くなく、星が降るがごとく煌々南アルプスの大自然の中で天の川を仰ぎながら食す大盛りのとん汁は格別であった。

21時45分、暑いテントの中で大男に囲まれつつ就寝。あまりの暑さに夜中、鼻血が出た。

8月3日<土>

4時起床。新種の朝食である、『山溪』じこみのパン雑炊を作り、中々の好評を得て満腹になり5時45分、勇んで出発。単調な林道歩きには正直飽きてきた。足下をじっと見つめたまま歩くことに専念する。だが、それが裏目に出て絶対飲もうと決めていた名水の『寝耳の水』の標柱に気付かずに通過してしまい、後に後悔することとなった。営林所の車が所々におかれた林道を一步一步確実に歩き、6時45分休憩とするがやはりN. Tさんが遅れている。7時5分、足のまめの処理にとまどい皆より遅れて出発。常に一番手に行くアンディを猛スピードで追いかけろ、あとわずかで届かず。7時50分、名瀑「三昇ノ滝」に到着。三段で優雅な40mあまりの滝であるが、何かがおかしい。そう、この滝には滝壺がなく、直接林道に水が落下しているという世にも不思議な滝なのだ。滝の水で林道が水びたしになっており、その水で水出し緑茶を作ったがその味は最高だった。

9時、営林所の人々が利用するかなり大きな釜ノ島小屋を通過。寸又川を渡り右岸に出てしばらく行くと、9時35分ついについに光岳登山口に到着。

ああ、『寸又峡温泉39.9Km』の文字が眩しい。山に登ってもいないのにこの充実感、達成感。荷物を投げ捨ててひっくり返る。空の青さが目にしみる。僕が到着して15分以内に五番手の佐久間君までが到着。さて、昼飯を食べて光岳へ登るとするかと思うも、N. Tさんが来ない。待てど、暮らせど来ない。11時前になりこれは非常事態だということで僕が走って偵察に行くと、皆のいるところまでわずか300mで休んでいた。どうも体調がおかしいらしく、この日は光岳へ登ることをあきらめ、登山口に幕営することにした。

ホットドックを食べながら思う。こんなに立派な道標と吊橋をこの奥地に作ってどれだけの人々が利用するのかと。どの登山客も疲れきってこの吊橋を渡ることであろう。この登山口まで一日一本でもバスを入れてくれたらどんなに光岳へのアプローチがよくなることか。確かにまともな登山客はここまで入ってくるのが出来ないから、山深さが残っているとも言えるが。先輩達が登山口の先の休憩小屋を見に行くとすでに先客がいたらしいが、どの車で来たのかと尋ねられたという。歩いてきたと答えると信じられないといった顔をされたらしい。営林所関係の人たちは遊びでも車で乗り入れることができるようだ。

さて僕らは寸又川に下りて、水浴びをして遊ぶ。この清らかで冷たい流れはまさに命の水だ。佐久間君は水に足をつけたまま寝てしまい、S. K先輩は生まれたままの姿でこの冷水に頭まで浸かってしまい、皆、はじけ飛んでいた。とくに佐久間君は板の幅が20cmのよく揺れる吊橋の上で大の字になって寝てしまうという離れ業をやったのけた。各自がこの日の停滞を楽しみ、夕食は汁気の多いシチューを食し、夜はYWVに伝統的に伝わる『ドボン』というトランプゲームを教わり19時30分、川音を聞きながら就寝。

8月4日<日>

3時起床。夜中に雷がゴロゴロと鳴り、雨が少々降ったらしいが僕は気付かぬまま朝を迎える。朝食は雑煮でアンディももちがうまいと言って食べてくれる。食料係の僕としては一安心。

4時50分、一人ずつ慎重に揺れる吊橋を渡っていよいよ横浜を出て4日目にして山に取り付く。樹林帯はこの時間ではまだ暗く見通しが利かない。崩れやすいトラバース道をわずかに登ると道が右左上の三方向に分かれていた。トップを任されていた僕はかなり迷って、左への道を選択しかけたが自信がない。N.Tさんの指示を仰ぎ、やはり右へ行くことに。確かにこっちの道のほうがトレースははっきりしていたが、昭和61年改正の2万5000図では左側へ回り込んで右側(北東)に続く尾根を登っている。現在までの間に道が変わったのだろうか勝手に納得してN.Tさんに続く。トレースははっきりしているが倒木が多く歩きにくい。入山者が少ないから仕方ないのだろうと思いつつ腐った木の多いかなり危険な『登山道』を進む。途中で最後尾を行くS.K先輩が足場になっていた、腐った木が折れたために小石混じりの急斜面を3mほど落下する。さらに佐久間君のザックに外付けしてあった『ラジ盆(ラジウスをのせるお盆、学食のお盆)』が木に引っかかり佐久間君の身代わりとなって急斜面を滑り落ちていった。

次々現れる難関を何とか突破し、これはルートを間違えたのかもしれないと思いつつも、もう引き返したくはないので前について行く。そして最大の難関、大きなガレ場が現れた。

S. Tさんは大丈夫だと言いつつスルスルと通過してしまうが、僕はかなりビビって、角度45度くらいの足場のほとんどないガレ場をわずかに生える草につかまりながら慎重にゆっくり通過する。僕のこれまでの登山経験の中で最も恐ろしかったと断言できるその恐ろしいガレ場を突破し6時10分、ようやく休憩しじっくり地形図を眺めルートを間違えたことを確信したが、すでに引き返すことは出来ない。あのガレ場を下りながら通過するのは不可能だ。地形図を読み、北へ登る尾根を登れば正規の登山道に復帰できるとの確信を得て、S. K主将を先頭に道なき道を開拓しながら非常に急な尾根を木の根にしがみついて登る。30Kgのザックがとくに重く感じられた。S. Y先輩の高度計によれば一時間で100mしか登れないという悪銭苦闘ぶりで、ルートを外れて4時間経った9時、ようやく正規の登山道に合流した。

普通の登山道がこんなにも歩きやすいのかと思いつつ植生豊かな木々を眺めつつ登る。9時50分、小さく開けた1656mの三角点のある広場に着きパンの昼食とする。あまりにものどかで眠たくなってきたが水が少なく限られた量しか飲むことが出来ないのが辛い。

パンと紅茶を食して後、カラマツを中心とした豊かな樹林の中をのんびり歩く。11時25分、水なし休憩。初めて登山客と出会う。

夫婦二人組みで、寸又峡温泉から歩いてきたという。

昨日早朝に寸又峡温泉を出発し登山口を目指したがあと8Km地点の栃沢付近で力尽き、そこに幕営したらしい。

吊橋を渡ってすぐ道に迷いませんでしたかと尋ねると、やはり僕達と同じく右の道に行ってしまう、一時間歩いて引き返したという。その夫婦も僕達と同じく山中8泊で北岳まで行く予定らしい。

またその夫婦に初めて、僕の自作のザックに付けられた旗、『YWV南アルプス大縦走2002』と書かれたものを見られて嬉しい。

休憩後、急登、しばしで、比較的平らな道となりシラビソの多い樹林の中を緩やかに登ると木々に囲まれた石見平に至りザックを下ろす。2043m、ようやく標高2000mを越えた。一人水二口、ああ、のどが渇く。佐久間君は疲れきって寝そべる。

さらに緩やかな道を行き13時10分、百俣沢の頭への急登を前に光岳の南に位置する池口岳をのぞみつつ休憩し、僕とS. K先輩とアンディの三人で先発隊を結成し一気に標高差250mを登りつめる。14時10分、標高2418mの百俣沢の頭に登頂。アンディの歩く速さには驚くばかり。必死になって百俣沢の頭から先の緩やかに上下する登山道を歩き、追いかける。

14時54分、後ろから「靴が死んだ」とのS. K先輩の叫びを聞く。S. K先輩の靴は高校時代からの相当年期の入ったもので、僕から見ればとっくに殿堂入りさせて良いと思われるボロボロの代物である。その靴の底が真二つに割れ靴下が見えるほどになってしまったのだ。さすがの主将も死んだと判断したらしい。どうしようもないので、僕の下界用&テン場用サンダルを履いてもらうことにした。

15時20分、突然ダケカンバの樹林帯からハイマツの尾根に出て、光岳が目の前に飛び込んできた。ハイマツの南限と言われるハイマツの間をぬって光小屋へ。ようやく高山に来たと言う実感がわく。

朝吊橋を渡って10時間45分、長きにわたる戦いを終え標高2450mに建つ県営光小屋に到達。テン場代一人400円を支払い、スタンプを押し、小屋の水を分けてもらい、バイオ式トイレの説明を聞く。さらに吊橋を渡ってすぐの右へ行く道は何かと尋ねると、カモシカ道とのことであった。つまり僕達はカモシカの作った道を延々と進んでしまったのだ。光小屋は超ハイテク小屋であり、小屋のおじさんは非常に親切な人であり、かつ展望もよくほんとにいい小屋だ。この山深い地にこれだけの小屋を建てるとは相当なものである。

4張りも張ったらもういっぱい小さなテン場にDUNLOPを張り、後発隊の到着を待つ。僕が着いて1時間後の16時35分、後発隊が着きすぐにマーボ豆腐と味噌汁を作る。赤く染まった雲海を臨みつつ食べるマーボ豆腐は最高で、皆と楽しく雑談していたが突然スコールのような大雨に襲われ、ザックを大急ぎで小屋に入れさせてもらいテントに潜り込む。その前に1つ書かねばならないことがあった。S. K先輩の靴を小屋のおじさんに見せたところ、なんと無料で長靴をくれたのだ。なんと親切な主人であることか。感謝、感謝。

19時前、ワインを飲むよう誘われていたS. K先輩、N. Tさんが小屋へ行く。スコールは30分ほどで止み、2人の先輩はコップいっぱいワインをたたえてテントに戻ってきた。僕達もワインのおこぼれをもらい体も温まりさで寝るか、僕が歯ブラシをすべくテントの外に僕が出ている時にそれは起こった。S. K先輩の「吐きそう」の声の後1秒、ビシヤッという音がテント内に響いた。ああ、せっかくのマーボ豆腐がと思いつつゲロまみれとなったテント内を掃除。

さて今度こそ寝るかと思うと、N. Tさんがおもむろにテントを出て行く。そして10秒後、嘔吐する音が聞こえてきた。山で飲むアルコールは効くと言うけども、これほどとは。ふたりの先輩がもともとお酒にとっても弱いと知ったのはだいぶ後のことだった。出す物を出してスッキリした先輩に囲まれ、いろんなことがありすぎた一日に思いを馳せ21時寝る。

8月5日<月>

3時20分、予定より20分遅れて起床。前日に炊いておいたご飯でお茶漬けとする。白んできた空の下光岳の山頂へ急ぐ。小屋から15分ほどで山頂に着くと、ちょうど朝日が地平線近い雲から顔を出す所であった。

深き蒼の空の一角が除々に黄金色に染まり出し、火の玉のような真に赤き太陽が何かに引っ張られるかのごとく瞬く間にその全貌を見せると同時に、聖岳、赤石岳、荒川岳の3000メートルを越えるあまりにも大きな山体に光の矢が射し込み赤く燃えた。雲のあの輝きは何であろうか。まさに金色に輝いている。

僕の山頂での御来光初体験のその光景は重厚よりむしろ透明に感じられた。毎朝これだけ壮麗な光景を造り出して昇っていく太陽の偉大さに感じ入った瞬間であった。

光が射し込み輝く光岳と書かれた標柱をまん中に記念撮影した後、テン場に戻り重い荷物を背負って6時40分、出発する。霧が出てきて見通しが聞かない中、センジが原、静高平と木道が続く山上の湿原を通り、三吉平に向けじめじめした樹林の中を下っていく。

7時25分、三吉平に着き休憩した後さらに歩を進める。いつの間にかすっかり霧がとれ、三吉ガレなど所々で聖、赤石などを望みながら単調な道を行くと、途中でこの山行で初めて中高年の団体と行き交う。南アルプスを歩いていて思ったが、中高年の割合が他の山域と比べ少ないのだ。やはり中高年となると南アルプスを縦走するのは体力的に少々厳しいのであろうか。

8時35分、何もない易老岳に着き休憩。ポカンと開けた平地で水出し緑茶をがぶ飲みし、喜望峰を目指す。坦々と歩を進めていたが突然S.Y先輩が木の根に躓きひっくり返り、額に傷を作る。

10時45分、喜望峰着、仁田岳を往復する。ハイマツ帯の展望のよい道をスキップしながら15分にして三百六十度丸見えの仁田岳に登頂。これから行く茶臼岳、上河内岳(かみごうちだけ)、聖岳、先に登頂した光岳、何でも見える。日本は山だらけの国であると断言しよう。

喜望峰に戻り、茶臼岳を目指す。その名の通り茶臼に似た山容は、中々優美で美しい。しかし荷物が肩に食い込み痛くてしょうがない。これでは山々を觀賞する余裕もない。足は大丈夫なのだが、肩の弱さを実感する。重いよーと呟きながら標高2604mの茶臼岳に至る。茶臼からの展望も素晴らしく、とくにどっしりとした聖、上河内の姿が良い。メモ帳に今回初めてスケッチをする。

これがアルプスだよと思いながらざれた斜面を急降下し、畑薙湖方面へ下る横溝沢分岐に着きここで昼食とする。森林限界を超えた稜線で風が非常に強い中、石とロールマットで風除けをつくり野菜たっぷりの焼きそばを調理。すきっ腹に焼きそばのうまさが染み渡った。

14時10分、本来ならテン場に着いていなければならない時刻だがこの日の行程はまだまだ長い。二重山稜の間に広がる山上の楽園と言える花畑を抜け、展望の良いハイマツ帯を進む。展望は良いが、荷物の重さに肩が痛すぎて展望を楽しむどころではない。一番後ろにさせてもらい、ザックを岩の上に降ろしては肩をまわし、早足で皆に追いつくという行動を繰り返しているといつの間にか、上河内岳の分岐まで来ていた。突如流れてきた霧に何も見えないが二百名山でもある山頂へ手ぶらでガレ場のジグザグ道を急登して向かう。霧に囲まれた山頂はどこまでも静かであった。しかし、寒い。真夏だというのに震えるほど寒い。じっとしていると冷えるので早々に2803mの山頂をあとにした。今日一日だけで2591m、2604m、2803mと次々に自己最高所記録を更新したことになった。

分岐に戻り再び重い荷物を背負って聖平に向け標高差約500メートルの下りに入る。16時05分。南岳に登り返すとさっと霧が晴れ、はるか下に聖平の小屋が見える。荷物のせいで下りに相当な負担がかかっていたので、僕は溜息を吐く。今日一日は佐久間君のペースで動いており、佐久間君、登りはゆっくりだが、下りはかなり速い。僕は下りの衝撃で、ザックが歩くたびに肩に食い込み激痛が走り、おかしな歩き方になるし、ペースが遅くなる。必死に前についていったが、コースタイム2時間の所を一度も休憩をとってくれる気配がないので僕は勝手にザックを投げ捨てて休憩する。

皆の姿が見えなくなるとどこまでも静かになり、標高3000メートルを越える聖岳が目の前に異常なまでに大きい。印象的な聖の姿をスケッチしつつ何か、ちあきなおみさんの名曲『喝采』を歌っていると気分が昂揚して涙が出そうになった。この聖の大きさを見よ。己の小ささを知れ。この瞬間に仰いだ聖の圧倒的な大きさはいつまでも忘れないだろう。

皆に追いつくため全速力で下る。一旦は皆に追いついたが、のどの渇きが限界にきてフラフラになってしまった。アンディに水を分けてもらい聖平を目指したが、近くに聖平小屋の屋根が見えたところで安心して休憩する。パーティ行動を乱しているなど認識しながらも。

17時50分、聖平に到着。コースタイムが10時間25分のロングコースをこれで歩き通したことになる。肩が痛くて仕方がないが遅くなってしまったのですぐにツナカレーを作る。野菜をはやく減らしたいのでたくさんジャガイモ、玉葱、人参を入れて。

聖平小屋も近代的な小屋で大きく、いろいろな物を売っていたのでS.Y先輩にりんごジュース(300円)をおごってもらった。

夜はまさに降るような星空で神秘的ですらあった。水場はポンプで引かれた水道、大きな発電小屋を備えているなど素晴らしい宿泊施設の聖平であったが、隣の8人組ワングルの異常なテンションの高さには辟易させられた。

21時、疲れきって寝袋に潜り込む。

8月6日<火>

聖岳は今回の縦走の中で最も印象に残った山である。聖岳は日本最南の3000m峰にしてその山容は非常に大きく、聖岳と上河内岳の鞍部である聖平からも700mを登りかえさなければならぬ上、北へ抜けるためには400m下り兎岳に再び200mの登りで登頂し、さらに小兎岳、中盛丸山、大沢岳と越えて百間洞山の家まで一日で行かなければならぬ。この日僕は本当に疲れた。パーティ行動の歩きかたに慣れていなかったこと、荷物が重かったこと、これまでの疲労が蓄積していたこと、この日の登り下りがあまりに激しかったこと、それに寝不足であったこと、それらが混在してこの日の疲れを生んだのであろう。しかし、聖がすごい山であることは実感として体験できた。

3時起床。フリーズドライのパスタを食し、8人組ワングルの追いかけるように5時15分、聖平より木道を歩いて出発。蒸し暑い樹林帯を歩き伊那谷側の易老渡に下る分岐点、薊畑を5時47分、通過する。S.K先輩の携帯ラジオを聞きつつ登る。ラジオからは下界からの声が聞こえてくる。こんな山奥を歩きながら下界の声を聞くと不思議な気分だ。今日も下界は35度以上まで気温が上がるのかと思いつつ、15度くらいの山の中を行く。

6時20分、休憩。歩くスピードが少々遅く歩きづらい。歩きづらさを我慢してなおも樹林の中を行くと森林限界を超えた稜線に出、目の前に圧倒的な聖の姿が飛び込んできた。頂上は案外近くに見えたがこの後が長かった。聖を目の前に望む標高2662mの小聖岳を越え、水場を通過すると頂上直下のざれた急坂のジグザグ道となる。頂上を見上げながら聖平からピストンで登る人たちの軽装をうらやみつつ肩の痛みを耐え登ること一時間以上、

8時43分ついに標高3013m、自身初の3000m峰の登頂を果たした。

深田久弥氏も名著『日本百名山』の中で語っているように、聖の頂に着いてまず目を奪われたのは南アルプスの盟主としての貫禄をあますところなく発揮して立つ赤石岳の姿であった。そのボリュームは感嘆に値する。しばらく茫然と眺めた後、360度を見回してみると富士山や中央アルプスなどの名だたる名山が手に取るように望むことが出来た。

その展望を楽しみつつ例によってOBの先輩の差し入れである『うまい棒』を手に皆で記念撮影。聖の登りでかなりペースが落ちていた佐久間君は相当疲れたようで山頂で寝そべる。僕とN.Tさんは奥聖岳へ向かう。手ぶらで3000mの稜線を歩いていると鳥になったようだ。左右に深く切れ込んだ谷を見下ろしつつ15分ほどで奥聖に到着。そして『昴』を歌う。この壮大なパノラマを望みながら壮大な曲を歌うのは実に気持ちよかった。誰もいない奥聖から聖に引き返し10時05分、荷物を担いで聖を後にする。奥聖を往復しなかった面々は1時間22分も聖の山頂に留まっていたことになる。

兎岳との鞍部に向け400mを急降下し11時、小広い所でラーメンの昼食とする。ラジウスの調子が悪く火が中々点かなかった事もあり、玉葱入りラーメンを煮込むのにかなり時間がかかった。その間僕は非常に眠くなり佐久間君に調理を任せ、岩にもたれかかって寝てしまった。

12時37分ラーメンを食べ終えた僕は兎岳への登りにかかった。この登り、本当に疲れた。全身がだるくさらに眠気が襲い、足下だけを見つめて登った。13時12分、兎岳避難小屋、通称うさぎ小屋に至りザックを下ろす。うさぎ小屋はホントにうさぎ小屋だった。幕営スペースが多少ありテント泊なら良いが、小屋泊まりは便所の匂いがきつくできれば遠慮したいと思わせるような小屋であった。

うさぎ小屋からひと登りで兎岳山頂。下って上り返して小兎岳14時20分、休憩。ずっと展望の良い稜線が続き素晴らしい景色であったが眠くて楽しむ余裕がない。眠いのは相当体に疲れがたまっている証拠だと思いつつ、10分ほどウトウト。中盛丸山の急な登りを何とか登りきり、15時45分。百間洞山の家の屋根が近くなってきた、早く着かないかな、と思いつつ休憩。S.K主将は16時からの気象通報を聞いて天気図を書くべく一人山頂に残る。

大沢岳との鞍部に至り大沢岳をトラバースする新道に入る。最後、大沢岳に登ることを覚悟していたので感謝しつつ歩かせてもらう。山小屋がすぐ近くに見えたところでもう着くからいいかと聖を見ながら一人、休憩する。眠ってはならないので聖の姿を書き込みながら『若者達』を歌う。歌いながら絵を書いているとすごく感傷的な気分になりどこまでも悠然とした雰囲気です。立つ聖岳に頭を下げたくなった。

再びボーとして歩き始めると後から山を下りてきたS.K主将に追い抜かれる。途中で横断した沢でその冷たい水を味わい、もう一度聖を眺めながら休憩する。8月6日、今度は広島への鎮魂もこめて『さとうきび畑』を歌う。聖が大きい。フルコーラスを10分余りかけて歌い終わると何故か眠気がなくなり急いで皆の待つテン場に向かった。

17時ちょうど、百間洞山の家に到着。百間洞のテン場はすぐ横を沢が流れているという絶好の場所にあるが、残念ながらその沢の水は汚染されており飲めないらしい。登山客のテン場における行動が沢をこのような状況にしまったのである。その沢音を聞きながら夕食の準備。すると、「もしかして横浜国大？」と言う声が聞こえた。33期のHさん、僕達の大先輩に当たる方であった。僕が着ていたYWVの山シャツと骨董品のラジウス、そしてボコボコになったアルミの食器から横浜国大であるとわかったらしい。僕達の使う山道具の歴史と、出会いの偶然を感じた一瞬であった。

今日の献立はレトルトの牛丼である。46期が炊事をし、44期の先輩達はテントの中で緊急会議。アンディが8月12日にハンガリーに帰るため10日には下山せねばならないが、すでに予定より1日あの林道のために延びており、計画通り北岳まで行くと10日には下山できない。1日に11時間以上歩き通せば百間洞からの行程を1日短縮することができ、10日に下山することが可能である。今まではそのつもりでいたが、先輩達が僕の疲れを考慮して三伏峠から塩川へ下りるエスケープルートを取るという判断を下した。僕の体力不足のために先輩らの最後の夏合宿をエスケープという形にしてしまい申しわけないが、今後は参考コースタイムが6時間前後の楽な日程になり疲れることなく南アルプスを楽しめるな、という安堵感があったのも事実だ。結果的にこのエスケープは正しい判断だったと今は思う。

牛丼を食べ、食器を舐め、20時45分、死んだように眠る。

8月7日<水>

4時起床。3時起床予定であったが起床係の僕が今日の行程は短いし、眠いしと二度寝すると皆も起きずに4時になってしまった。朝食にはゆめん、これは『山溪』じこみのメニューである。まずくはなかった。

6時3分、赤石岳に向け例の8人組ワングルよりも早く出陣。この日も快晴、朝の涼しい空気の中、ピッチが早まり350mの標高差を一息に登り、百間平に6時53分着。伊那谷を越えて中央アルプスが良く見える。南アルプスに入山して6日目、初めて下界の町が見えた。しかしはるか下、ここは標高2800mの高地にして平らな別天地。空はどこまでも青く、風はやさしく、這松はひろく広がり、花は揺れ、眼下に小沢川が深い谷を形成し豪快な景色を造り出している。百間平は実に清々しい高地であった。

佐久間君の父についての話を皆でしながら、目の前の大きな赤石岳を前に百間平、馬の背と展望の良い稜線を闊歩し、かなりのハイペースのまま、巨大な赤石岳にガレ場のトラバース道をもって取り付く。百間平を歩く8人組ワングルの姿が小さい。昨日苦戦しながら越えた聖が大きい。

スケールの大きさを感じつつ気持ち良く鼻歌を歌いながら茶褐色の巨石を踏んで登り、休憩なしで百間平から1時間40分後、8時43分に南アの盟主赤石岳の頂を踏む。3120m、聖よりも117mも高いがその山頂はひろく台地ようになっており、その一角に赤石岳避難小屋が建っている。展望は一級品。聖、荒川と3000m級の山が両脇を固め、荒川の後方には塩見、間ノ、北、仙丈と名だたる南アの山々が連なっている。

そして優雅に裾野を引いた富士が美しく立ち、相変わらず中央アルプスの名山達が雲の上にその山頂を突き刺し、遠く僕にとっては馴染み深い奥多摩、大菩薩の山々、さらに歩荷訓練で登った甲武信岳を始め奥秩父の山稜が並び、同定の出来る山々は数え切れない。

その展望を楽しむ人々は多く、中高年の20人余りのパーティ、神戸大ワングルの6人、それに僕達と個人山行の人で賑わっていた。神戸大のパーティは北岳から6泊かけてここまで来ており、赤石の後は聖に登らず下山するようだが聖に登れないのがよほど悔しいらしく、男子部員が裸となり背中に『聖岳』とマジックで大書きして写真を撮っていた。学生らしいなど見ているとN.Tさんもそれに対抗して裸となり、赤石岳の標柱とともに記念撮影。気温13度、裸は寒い。しかも風ビュービュー。百名山3つ目。3本目のうまい棒をむしゃむしゃ。袋が気圧の差により今にも破裂しそうであった。

50分間展望を楽しみながら山頂に居座り、荒川岳との鞍部に位置する荒川小屋に向け高山植物を楽しみながら下る。一部の花の名前しかわからず悔しい。花の名前も除除に覚えなければ。稜線散歩しながら3081mの小赤石岳を越え、歩きにくい岩礫の道をジグザグに大聖寺平へ。

大聖寺平で荒川三山(前岳、中岳、悪沢岳)を望みながら小休止した後、稜線をトラバースする平坦な道を通り標高2620mに建つ荒川小屋に11時25分、到着。

荒川小屋もこれまで見てきた小屋に劣らず近代的な新しい小屋で、とくに食事のメニューは豊富であった。

S.Y先輩は最後の最後まで『荒川岳スタミナ丼』を食べたい、食べたいと繰り返していた。

先輩達がカルピス(200円)を飲み終わるのを待ち、テン場へ行く。

素晴らしいテントサイトだった。正面に富士を望み、左右に赤石、荒川が聳え、展望台かと思わせるような地にテン場があり、その上冷たい『南アルプスの天然水』が豊富に流れる水場が歩いて10秒の所にあつたのである。

その素晴らしいテントサイトにテントを張り、テントの下に敷くシートを乾かし、またザックカバーや寝袋など濡れたものすべてを日干しし、昼食のコーンラーメンを46期の3人で作る。陽射しがあると2620mの高地でも暑い。

日陰でラーメンを食し、日陰で今日の夕食と明日の朝食と昼食の仕込みをする。そして事故は起きた。

ラジウスを佐久間君が点火しようとした時、突如暴発、佐久間君の大切な前髪が少し燃えて縮れてしまったのだ。

大事に至らずホッとしたがラジウスを扱う時は細心の注意が必要だと肝に銘じた一件だった。

それでも何とか、今回の合宿を通じ米炊き名人となった佐久間君の尽力で、大コッヘルで米を8合、2回炊き3食分のご飯が出来た。そのうち6合に『すし太郎』を混ぜ、いなり寿司を特大30個作る。

油揚げが破れるほどたくさん米を詰め、かなりてこずった。

食事の用意が一段楽し、水場へ水浴びと洗濯に。『南アルプスの天然水』は少し体にかけただけで心臓が止まるほど冷たかった。靴下とズボンを洗い、強い陽射しで乾かす。

それぞれが山の昼下がりを楽しみ夕食。キャベツを大量に入れた辛い中華料理とキムチスープそして大根飯が今晚のメニュー。

楽しき夕食を終えると富士が赤く染まった。赤富士だと言いながら写真を撮りあう。

山の醍醐味を十分味わい就寝の準備。その前にゴミを誰が持つかを決めるため例のトランプゲーム『ドボン』をする。白熱した試合の後ゴミ持ちが決定し、8時就寝。

が、毎夜ながら隣の8人組ワングルの声高にゲラゲラ笑っておりうさ。

N.Tさんが隣のテントに乗り込みようやく静かになる。それにしても8人組ワングルは意味のないことで良く笑う。

そして夕食は毎晩小屋へ食べに行く。

あのテンションの高さを毎日持続しながら夜遅くまで騒いでいるのには感心するばかりである。

8月8日<木>

3時起床。昨日午後、十分体を休めたのですっきりと目が覚めた。炊いておいたご飯で蟹&鮭雑炊。テントの外に出てみるとシルエットで浮かび上がる富士の北側が青白く、しばらくすると尾根に阻まれ見えないが日の出の時刻を迎えたのか赤石岳の山頂が赤く燃え、徐々にそれが中腹へと下りてきて大聖寺平に達し、山全体が黄金のごとく輝いた。

山の夜明けである。

光が達する前、5時05分に荒川岳に向け荒川小屋を後にする。展望の利くガレのトラバース道を冷気の中、気分良く歩く。

振り返れば朝日を体全体に浴びて忽然と立つ赤石岳が、見上げればこれから向かう3141mの標高を擁する悪沢岳(わるさわだけ)が。

荒川岳の稜線のすぐ下まで来ると今回の縦走で一番と言えるお花畑が大きく広がっており、ミヤマキンポウゲの群生を始めとして数多くの花々が咲き誇り短い夏を謳歌していた。花々と展望を楽しみつつ休憩なしで荒川岳の稜線に至り、悪沢岳を往復するためザックをまとめて置く。

6時22分、荒川小屋から1時間17分であった。ふと北側へ目を転じると驚くべきことに、遠く北アルプスの峰々の連なりがはっきりと捉えられた。穂高、槍、鹿島槍、五竜、白馬等々、数々の山々が判別できる。盆地の上には厚い雲がかかっているが上空は風が強く、空気が澄んでいるようだ。

荒川中岳(3085m)を越え中岳避難小屋へ。小屋で悪沢岳が描かれたスタンプを押させてもらい、鞍部へ下って行く。富士山が雲海に裾野を没す、筆舌に尽くし難い美しさに目を奪われつつ花咲く登山道に行くのはまさに爽快。皆で空中庭園、山上の楽園などと形容しながら目の前に立ち上がる深田久弥氏曰く『南アルプス屈指の存在』である悪沢岳を目指す。

重いザックがないと皆ペースが急激に上がる。瞬間に悪沢岳への岩場の混じる登りを駆け上がり、参考コースタイムが1時間40分のところわずか37分で中岳避難小屋から悪沢岳に登頂した。

7時27分、悪沢岳山頂。早い時間に関わらず人が多い。展望が凄まじい。風が猛烈。信じられないほど空が青い。寒い。風で体温が奪われる。3141米、悪沢岳。深田氏も悪沢岳と呼んでほしいと語っているのに山頂の標柱は荒川東岳となっていた。残念だがそれを囲んで記念撮影、今回の合宿としては最後の『百名山』であり、自身11山目の『百名山』であった。

立山を除く日本にあるすべての3000m峰(21座)を望む、賛美の言葉すら出ない圧倒的な展望を楽しみつつ、岩陰で昨日作っておいたなり寿司を一人当たり5個の割り当て分すべてを胃袋に収める。しかし寒い、この寒さがなければもっとのんびりしたいところだが耐え切れず滞在時間36分で3141mを後にする。中岳との鞍部に降りる途中、8人組ワングルとすれ違う。山頂はすごく寒いと声をかける。

8時50分、ザックを置いてあった分岐まで戻りしばし休憩。8人組ワングルのザックも置いてあったので試しに持たせてもらう。さすがに僕のザックほどは重くなかった。僕達は食料を持ちすぎて少々ザックが重すぎたのかもしれない。米20Kg、ジャガイモ12個、玉ねぎ10個、ニンジン6本、ダイコン1本、キャベツとレタス1個ずつ、キュウリ6本、レトルト食品多数、カロリーメイト8つ、その他、結果的に5Kg以上の米が余るなど、今後食料計画について見直すべきかも知れない。

荒川大崩壊地を望む荒川前岳(3068m)を通り、崩壊地で左側がすっぱり切れ落ちたかなり危うい稜線を慎重に通過し、広く長いガレ場を猛スピードで下る。この歩きづらくて仕方ないガレ場を、先頭に行く長靴を履いたS.K先輩と、S.K先輩にピッタリと張り付いて歩く佐久間君は驚異的な速さで駆け下り、逆に歩きづらそうなアンディは最後尾を張るN.Tさんとともに徐々に前と離れていく。僕はこのガレ場の最後の最後で浮石を踏み転倒。転倒して見上げる空は青かった。けがも痛みも全くなし。重くでかいザックのおかげである。

稜線をトラバースする樹林の中の道を進み、11時、『高山裏小屋で泊まれる方はここで水を汲んだ方が良いです』と書かれた立て札に従い、細い流れで水を汲む。20分かけて計24リットルの水をポリタンクに満たし、11時35分、高山裏に到着。高山裏小屋はこれぞ山小屋としてあるべき姿だと思わせるような、素朴な感じの良い小屋であった。そしてこの小屋の主もこれぞ山男といった豪快なおっちゃんであった。「おい！横浜大学」と呼び、「ゴミがあるなら今すぐもってこい、燃やしてやるから」とありがたいお言葉を下さる。

7日間であまりにたまったゴミをすべて指示通りぶちまけると、「おおすげー量だな」と言いつつ、僕達の次に到着した某大学ワングルにも「ゴミを持ってこい」と言い、部員の一人が「マジですか？」と声をあげると「そんな汚い言葉を使うな」と恫喝。

また長靴履きでやぶれたニッカホースのズボンを履いたS.K先輩のことを「貫禄がついてきたな」と誉める。奥多摩小屋の鎌仙人を彷彿とさせる人物に、貫禄がついたと言われS.K先輩も嬉しそうであった。山にはこういう主が良く似合う。

さらに主曰く、今年は南アルプス登山のベース基地である木甚島(さわらじま)までバスが入っていないため南ア南部は人が少なく、小屋も宿泊客が少なく商売あがったりだとぼやいていた。僕はいい年に南アに来たのだと林道の土砂崩れに感謝する。

あまりに早く昼食を食べてしまったのでお腹が空いてしまいカロリーメイトを口に放り込み、僕は爽やかな風を浴びて

昼寝。皆は例によって『ドボン』をして遊んでいたようだ。

15時に起きて夕食と明日の昼食であるいなり寿司の調理。それにしても佐久間君は米炊きがうまい。おいしいご飯でこれまたビックサイズのいなり寿司を作る。夕食は釜飯とお吸い物にパイナップルの缶詰。

楽しき夕餉は終わり、山は闇と包まれたが一人、下界の町の灯を見下ろす崩壊地へ行く。はるか遠くに町の明りが揺らめいている。S.Y先輩のように下界が恋しいわけではないけれど、一人で遠い町明りを眺めていると少しく感傷的な気分になる。古い歌謡曲『岬めぐり』を歌う。『岬めぐりのバスは走る 僕はどうして生きていこう 悲しみ深く胸に沈めて この旅終えて町に帰ろ』。

下界と隔絶した生活を一週間以上送り、寝食すべてを6人で共にしているという経験は初めてであり、この経験を通じて山の素晴らしさ以上に学んだものがある。それはかつて言えば『生きる』ということだろう。

これほど毎日を真剣に『生きた』ことはこれまでなかった。そんなことを感傷にまかせて考えながらテントに戻った。

『カントリーマアム(おかし)』争奪『ドボン』大会を開催し盛り上がった後、8人組ワングルの騒ぎ声を聞きながら8時寝る。

8月9日<金>

3時、目覚める。雨の音がする。フリーズドライのチキンライスと五目飯を混ぜこぜにしてあたためた『チキン五目ライス』で朝食。フリーズドライの飯は初めて食べたが非常に美味。少々値がはるが今後長期合宿で使う価値はある。

5時20分、ゴアテックス加工(防水)のレインコートを着込み、「手紙よこせよー」と叫ぶ山小屋の主に見送られ、小河内岳(こごうちだけ)を目指し出発。緑濃い森林の中を横から降る雨に濡れつつ、所々に広がるお花畑に励まされながら歩く。雨は霧雨程度で激しくはないが全身がびしょりとなる。特に登山靴ではなくブーツを履いて歩いているアンディは、靴の中までびしょりで辛そうであった。

6時10分、2646mの板屋岳。木々に囲まれた何もない山頂であったがしばし休憩。寒さに震えつつ水分補給しすぐに歩き出す。なおも見通しが全然利かない霧の中を、保護色となった雷鳥の親子を見かけたり、突然現れるお花畑に驚いたり、単独山行のお姉さんの姿にビックリしながら歩を進め、7時30分、2623m地点で2度目の休憩。寒いが僕としては霧に包まれ、緑濡れる山も味わいがある面白と思う。皆は、雨は嫌いなようだけど。

標高2803mの小河内岳の登りにかかる。霧のためあれが山頂かと期待して行けども、その後ろにさらに高い山が霞んで見えてきたりするなど、何度もダミーの山頂に騙され8時35分、ようやく本物の山頂にたどり着く。記念撮影を一枚パチリ。寒いので避難小屋でいなり寿司を食べようと、新しく立派な建物に感激しながら小屋に駆け込むも、小屋の主人に中での飲食を断られ、風雨吹きすさぶ戸外で縮こまっていなり寿司をほおぼる。小屋の周りにいたもう一組のワングルと情報交換して9時20分、小河内岳避難小屋を後にする。悪沢山頂も寒かったが、この小河内岳の方がさらに寒かった。下界は盛夏だというのに。ただし、尋常ではない体質をもつS.K先輩はTシャツ一枚で平然としていたが。気温14度、霧、風強し。

前小河内岳に登り返し、なだらかな稜線をたどると1時間ちょうどで烏帽子岳に至る。雲の中の山頂で今回の縦走最後の山頂を記念して皆で写真を撮る。これが3日目から数えて23番目の頂上であった。11時、三伏峠小屋と三伏小屋の分岐点であるお花畑に着く。人工的に造り出したのではないかと思われるほどの花々の多さに目を見張る。三伏峠にテン場があるかどうかははっきりしないので、S.K主将が荷物を置き、走って小屋へ行き確かめてくる。その結果「有」と判明したので荷物を担いで日本一標高が高い2600mの三伏峠に向かう。

そして11時30分に着き、すでいくつかのテントが張ってあるテン場で雨の中、テントを設営。これまでの小屋の中で最もこの小屋が賑わっていた。今日で8泊目のテント泊にして最後のテント泊。大量に余っている食料で『食料食べまくりパーティー』を開催。大コッヘルで限界近い1升弱の米を炊き、まずはレトルトのビーフカレーで第一ラウンド。『ドボン』の真剣勝負でお腹を減らした後、レトルトのすき焼き丼で第二ラウンド。そしてお湯を沸かし、残っていたキムチスープやコーンスープ、お吸い物、卵スープなどを食べ尽くす。最後は『すし花子』やふりかけでご飯を腹に押し込む。それでも余ったご飯は翌日の朝食にまわした。満腹となって外は雨、することがないので寝ることにする。17時、外は明るい寝袋に潜り込む。

コッヘルや食器を舐め、さらに水で掃除して焦げの味やカレーのほのかな匂いなどのついたその水を、鼻をつまんで飲み込む生活ともおさらばだと思ふと寂しい。

思い返せばあつという間で必死な毎日だったと、今回の夏合宿で起きた様々な出来事を一つ一つ思い起こしているといつの間にか眠りに落ちていた。

8月10日<土>

10時間後の翌日3時、一度も起きることなく機械的な目覚まし音に反応してパッと目が覚める。雨の音はない。

カロリーメイトを2箱食べ、テントをたたみ4時半、まだ暗い中三伏峠から塩川のバス停に向け下り始める。この早い時間に三伏峠を出発したのは塩川から飯田線の伊那大島駅へ行くバスが8時20分と13時30分の二本しかないため、なんとしても8時20分のバスに乗りたかったからである。

足下をヘッドライトで照らし、プロジェクトXのエンディング曲『ヘッドライト・テールライト』を歌いながら塩川への標高にして1300mの長く急な坂道を駆け下る。

山際が徐々に紅の色に染まり出し、そして深紅となった。あの深く微妙な色合い、人工的に作り出せる色ではない。空の微妙な色合いの変化に見惚れ、躓つきながらも進むと足下も明るくなってきた。いつの間にか山際も透明な薄いブルーになっていた。今日と言う日が来たことを告げる朝日が山の向こうで完全に昇ったのであろう。

僕の鼻は非常に敏感で7日ぶりに高度が2000mを切ったあたりで、暑さに反応したのか鼻血が出てきた。鼻血を食い止め、皆に追いつくとそこは『南アルプスの天然水』が岩から沁み出す水場であった。この水のうまさはなんと形容しようか。最後の『天然水』、じっくりとそのままの冷水と天然水がかりで味わう。なおも一心不乱に下り続けると沢音が近づき、やがて水量豊かに水しぶきあげる塩川の溪谷に出た。溪谷に響き渡る水音、岩を噛み渦巻く水の流れ、そして溪谷全体の美しさを味わいながら前を歩くS.Y先輩の背中を追う。

塩川を2度渡り返すと谷が開け、そろそろバス停が近づいてきたと察知し最後はやはりこの歌『雪山賛歌』で締めくくる。歌いながら塩川のバス停にゴールイン。

6時30分、寸又峡温泉を出発して実に189時間15分後のことであった。しかし塩川バス停はまだまだ山奥で、こんな砂利道をバスが入って来られるのかと疑ってしまうほどの細い未舗装道だった。しかも、S.Y先輩が渴望していた自販機も一台もない。

ただ、だだっ広い駐車場があるだけの殺風景な所であるが、まずは集結。集結とは6人で右足を出した形で円陣を組み、主将の「2002年南アルプス夏合宿を記念して集結！」との声に続き「おー！」と叫び、ひとりが「フレイフレイ国大！」と言うのに続いて、皆で「フレイフレイ国大！」と声を出す。

さらに「ワングル」、「44期」、「46期」と続いて終了。

谷間でちょうど良いエコーが響いていい感じで集結を終えた。

駐車場にいた何人かのおじさんグループがじっとこちらを見ていたが。

塩川小屋で伊那大島への乗車券を主将がまとめて買い、バスの到着を雑談しながら待つ。8時前、2台のバスがほぼ満員の乗客を乗せて現れた。さすがは南アルプスの一大登山口のことだけはある。何組かのワングルもあり、山の天候を尋ねられいづらかの話を交わした後、これから入山する人々の姿を眺めながらバスに乗り込む。結局バスに乗り込んだのは僕達6人と単独登山をしてきたおじさん一人だけであった。

8時05分、定刻より早いがこのバスを臨時便として運行するという初老運転手の独断により、少年車掌が発車のアナウンスをする。バスは未舗装のデコボコ道を強引に突き進み、車内は震度6弱の揺れ。やがて広い舗装道となり典型的な田舎の集落が車窓に映る。山から生還したという気分だ。

バスは伊那谷に向かいだんだんと高度を下げ、塩川に沿った谷からパッと周囲が開けて9時15分、伊那大島駅に到着。蝉が鳴いている。夏の暑さが全身を包む。入道雲が湧きあがっている。瓦屋根の家々が夏の強い日差しの下に佇んでいる。これこそ日本の夏と思わせる光景が伊那大島の町にはあった。自販機で氷入りの冷たい抹茶を買い、駅のベンチに座って下界の空気を味わいながら飲む。格別の味に感じられた。

9時51分、上諏訪行きの普通列車に乗り込む。佐久間君曰く「どこまで行っても同じ景色」の飯田線に揺られること2時間強、11時58分に終点上諏訪に到着。観光案内所で教えてもらった温泉である片倉館に熱風の吹く中、急ぐ。汗臭い6人にはもったいないほどの豪華なつくりで少々躊躇しながらも、大正モダンあふれる大理石造りで底に砂利が敷き詰められた深く広い湯船で、10日間の疲れを癒す。下山後温泉のこの爽快感、たまらない。

13時28分発の列車で上諏訪より、勝沼ぶどう郷へ。小淵沢乗り継ぎで15時18分着。先輩が食事を奢ってくれるらしいのでぶどう畑の中を着いていく。すると何故か先輩達は郵便局へ向かう。郵便局に着くと現金を下ろし、そのままぶどうの丘へ。郵便局経由で約6Km、山を下りてからも良く歩くなと思いつつ1時間以上歩いて目指すぶどうの丘のレストランに着いて僕は正直、心底驚いた。

レストランの入口には皇太子、皇太子妃御来店記念と書かれた額縁の写真が飾ってあった。店内は見ると高級感が漂っている。そこへ、Tシャツ、短パン、サンダルで乗り込むと、先輩は平然と千円するコース料理とワインを頼みだした。僕は肉の焼き方なんかをボーイに尋ねられて、タジタジとなり緊張しながら恭しく運ばれてくる料理を食べた。この肉が何千円もするのかと思いつつ。一品ずつ飯が運ばれてくるという経験はこれが初めてであった。

先輩達に感謝、感謝。

奢ってもらった後にするワングルの儀式を行い、駅へ戻る。

ホームから甲府盆地を越えて北岳、間ノ岳、農鳥岳、塩見岳、そして今回その頂を踏んだ悪沢岳、赤石岳の3千メートル峰が堂々と聳えるのを感慨に耽りつつ眺めた後、18時32分の列車で、横浜に向け帰宅の途につく。

高尾、八王子、東神奈川と乗り継ぎ横浜、21時04分着。

相模線沿線に住む佐久間君とは橋本で別れ、他の5人は横浜で解散。

『18きっぷ』を同時使用していたアンディと相鉄口で別れ僕は一人、横須賀線ホームに登り、千葉行の列車の乗客に。

東京で行なわれた花火大会の影響で車内は混みあい、夏を感じながら大都会のネオンを眺めていた。

自宅には23時すぎに着。余りものの寿司を食べ、10日ぶりのベッドで寝る。聖の登りで苦しむ夢を見た。